



ない。プレーに謙虚な印象を受けた。」という。「俺たちが出でていたら勝っていたな。」と、二人で冗談も交えつつ、本当によく出場してくれたよ戦つていたと、「彼ら」を讀んだ。

築高校生の応援団と、吹奏楽部。あの日、決して即席ではない結束の強さが伝わってきた。一般生徒の応援団代表を務めた小石さん。大分大会で、普段の学校生活とは異なる「彼ら」を目の当たりにし、力になりたいと志願した。

見せろ、十王魂

彼らの夏、私たちの夏。②



一般生徒の応援団代表・小石貴京さん(3年)と、吹奏楽部部長だった木付菜月さん(3年)

「学校全體で戦っているんだ」という雰囲気を「彼ら」に届けたくて、声を振りしぼった。攻撃中、グラウンドに背を向けて生徒を指揮するため、試合はあまり観戦できなかつたが、好プレーの度、盛り上がり、声を振りしぼつた。吹奏楽部は、3年生がすでに引退。部長だった木付さんは、甲子園での演奏はさせてもらえないかもと心配だったといふ。「彼ら」のおかげで、長く演奏することができた。

吹奏楽部は、3年生がすでに引退。部長だった木付さんは、「彼ら」の夢、周囲からの期待、自分自身の願い。想像しただけでも気持ちが落ち着かなくなりそうだ。

監督は、この夏の長丁場を戦えたのは、「彼ら」の身体に特徴があると分析する。「通学が大変な子もいる。公立高校で勉強も疎かにできない。練習もきつい。そんな中でも、身体がしっかりとできていた。その日も、「彼ら」を前にして、家に着いたら家族に感謝するようにと、念を押していた。」「この夏、「彼ら」は、0を1にした。次は1を2にしていく事が大切だ。その時々に応じた目標を作り、達成していくほしい。やればできる。すでに、次なる「彼ら」と、阿

彼らに、続け

彼らの夏、私たちの夏。③



臥牛クラブの監督を務める石山立行さんと、岩尾成人君(小学6年)、となりは父親の律良さん。クラブの友達と応援に行った。自分たちの目標に向けて練習に励んでいる。

「同窓生、地域の方々、応援してくれるに、心からお礼を申し上げます。」この夏、「彼ら」に一番近いところ、否、「彼ら」と一丸となつて戦つてきた阿部監督。ついでに、取材に応じていただいた。本当に、地域で育ってくれた子どもたちだという気持ちが強い。電車やバスの中、途中に、声をかけていた。一言一言が、選手の力になつた。と重ねて謝意を述べた。甲子園球場は、ベンチが一

く球場。「杵高生らしいプレーを」との願いを込めて、必死に音量を上げた。卒業した吹奏楽部の先輩が、一緒に演奏してくれた。それが、多様な人が声援を送る甲子園。その土台を担う杵築高校生の応援団と、吹奏楽部。あの日の感動とともに、新たな感情がこみあげた。

あの日は、少年野球チームに所属する友達と一緒に、試合を観にきていた。「球場は、プロ野球とも違う感じがした。」独特の雰囲気を味わった様子だった。また、今の自分との差を感じたのだろうか。「高校生はレベルが高い。」と話した。「発決めてやろうと思う。」「将来、杵築高校でプレーして、リベンジしたい。」そう、友達と誓い合つた。あんな日も、話を伺つた。甲子園に出場した「彼ら」の中にも、夢が芽生えていた。

その少年野球チーム「臥牛クラブ」で監督を務める石山さんにも、話題を伺つた。甲子園に出場した「彼ら」の中にも、夢が芽生えていた。